

# 本邦主要雑誌における 外交論調

昭和57年7月号(128)

## — 総 目 次 —

### 1. 論 文

- (1) フォークランド戦争の知られざる背景 ..... 1  
    増田 義 郎 (中央公論 7月号)
- (2) フォークランド戦争最新兵器の大実験 ..... 12  
    田 岡 俊 次 (文芸春秋 7月号)
- (3) 戦略兵器体系の転機に ..... 24  
    久 住 忠 男 (世界週報 6月8日号)
- (4) 貿易摩擦解消へ格段の努力を ..... 30  
    森 永 和 彦 (世界週報 6月22日号)
- (5) 実感的「日本の孤立化」否定論 ..... 36  
    渡 辺 泰 造 (諸 君 7月号)

### 2. 論壇時評

- (1) 高 畠 通 敏 ..... 46  
    朝日新聞 6月28日付夕刊
- (2) 中 島 嶺 雄 ..... 49  
    東京新聞 6月29日付夕刊

(口) 六月二十九日付東京新聞夕刊より抜萃

中 嶋 嶺 雄 東外大教授

フォークラント諸島をめぐる英・アルゼンチン間の対決、世界的な反核運動の高まり、国連軍縮特別総会、「鄧小平改革」をすすめる中国の動き。今月も論壇各誌は、こうした国際問題に多くのページをさしてゐる。

伊藤成彦「反核―その壁と課題」(世界)は、反核運動をすすめる文学者の立場から、反核は反米につながるという論点、反核はソ連の立場を利するという論点はフランス新哲学派のグリュックスマンやフリーコーの意見もあり、国際的なものだとして、本欄でも紹介した吉本隆明や柄谷行人の反核声明批判を批判している。

宮内豊「反核アポロジ」(世界)も吉本、柄谷そして中上健次らの反核署名批判への再批判である。そして生島治郎「愛国という名の犯罪」(同)は、

文学者声明呼びかけ人の一人として、「われわれは下らない愛国心にこだわることなく、世界共通の願いととして、核廃絶をめざさなければならぬ」と訴え、村松剛と石原慎太郎との対談「反核運動の偽善を斬る」(人と日本Ⅱ行政通信社)で村松に「恐ろしいほどの政治に対する無知と、きわめて安直なヒューマニズムとが直結している」と冷笑される恰好の素材を提供している。

このように反核運動は、わが国内部においても様々な波紋を投じているが、広島市の反核集会でソ連の核を批判したとたんにフクロだたきにあつたという秀道広の手記「反核集会の演壇からひきずり下された私」(諸君)は、今日の反核運動のなかの陰の部分をはからずも照射しているという点で大いに考えさせられるものであつた。

秀は被爆二世として広島大学医学部に在学する青年であり、去る三月二十一日の広島集会に期待をもつて参じたのだが、「反米・反安保」、「レーガン

軍拡阻止」といったスローガンの林立のなかでいたたまれなくなり、司会者の承諾を得て登壇することができたので、「ソ連の核ミサイルSS20に対してだって反対する必要があるのではないか」と発言したとたん、一斉の罵声（ばせい）に包まれ、壇上から引きずりおろされてしまったという。もしもこのストーリーが真実であるならば美辞麗句を並べた反核運動もなにをかいわんやだ。

この点で袴田茂樹「恐怖と崇拜―混濁するソ連の核意識」（エコノミスト・六月一日号）は、「ソ連当局にとって、願ってもない運動」としての「西側の反核運動の盛り上がり」に大きな期待を寄せている。ソ連側の事情を抉っており、同時に「市民運動としての反核、広くいえば反軍思想さえソ連では起こり得ない」状況を活写している。この袴田の論点は、先の対談で石原が、「日本のインテリに知ってもらいたいんだな、核は怪しからんというんだったら、やっぱり中国に対する経済援助もやめていくように

したらどうですか、と」と語っているとおり、核保有下の中国にも当てはまるであろう。

こうした現実を考えれば、ストックホルム・アピール以来、原水禁運動にもたずさわったことのある高根正昭が「新聞がつくる反核運動」（諸君ノ）として描いている状況もあながち否定できないであろう。

そのようなとき、猪木正道「ドイツ社会民主党と“反核”運動（Voice）は小論ながら、反核運動の当面の問題点を率直に指摘して示唆に富むものであった。猪木は、当面の反核運動の間違ひは、「核戦力の均衡が東西間の平和を辛うじて保持しているという厳然たる事実から眼をそむけていることだ」と述べ、「できるだけ低い水準で、両陣営の核戦力を均衡させるような軍備管理こそ、世界の平和と安全保障する」という。

このような猪木のいう“恐怖の均衡”という現実をたいしてこそ反核運動は起こったのかもしれない。

が、それが一巡してみると、猪木のいう現実の重みがまた再確認されざるを得ない。だとすれば反核運動もまた世界的な一つのファッションにすぎないのだろうか。